

次世代につなぐ、コミュニティの創出

哲学者 前立教大学教授 内山 節

はじめに

私は、群馬県の上野村という山奥の村と東京都のどちにいるのか分からないという生活をしております。人口が 1300 人ぐらいの上野村にいて思いますことは、今、課題になっている例えば高齢者の問題は存在していません。高齢者を数で言うから高齢者問題なんです、上野村の場合には、何々さんがちょっと応援する必要があるとか、一人ひとりの問題になっています。そうすると、高齢者でももちろん応援しなければいけない人はいますけれども、中年だろうと、若者だろうと、やっぱり応援しなければいけない人は当然いるわけです。ですから、全て何々さんをどういうふう支援したらいいか、協力し合ったらいいかという話になります。

日本の共同体はどのようなものであったのか

この間、日本の社会は本当にいろんな意味で、ひたすら個人を追求してきました。しかし、今はコミュニティとか、共同体を追求する時代が変わってきています。共同体という言葉は、もともとの日本語にはない言葉なので、どうもコミュニティを翻訳するためにつくった言葉のようです。共同体は仏教用語ではないかという気がしますが、私自身はコミュニティ=共同体という使い方をしています。

明治以降本当に新しい言葉をいっぱいつくってしまいました。例えば自然という言葉もそうです。これもネイチャーを訳すために無理してつくった言葉です。それまでの日本の人たちは、自然と人間という分け方はなく、みんなが共に生きていることにすぎなかった。それで、わざわざ自然という言葉は必要ありませんでした。それから、宗教とか信仰も明治時代の翻訳言語です。明治以前の日本には、私たちが考えているような宗教、信仰は存在しなかったと考えています。今日、私たちが宗教とか信仰というと、教義を持っていて組織化されているものを意識しますが、そういうものではありませんでした。だから、宗教とか信仰という言葉も必要ではなかったということになります。こうした一連の中で、多分コミュニティ、共同体という言葉が出てきたんだと思います。

コミュニティは地域でそれぞれの人たちが、自分たちの生きる世界の中でつながり合いを持ちながらつくってきたわけですから、その地域の条件に合わせて、

実に日本には多様なコミュニティがかつてあったんだという気がします。ですので、私が書いた『共同体の基礎理論』という本があるのですが、共同体ってどこが原型なのかと言われると、非常に困るわけです。ただ、日本の共同体というのは、ある種の共通性もありました。それは共同体とかコミュニティは人間だけのものではなくて、自然を含めて捉えられていたことです。だから自然という言葉は必要なかったわけです。

それからもう一つの特徴は、生きている人間だけではなくて、死者を含めてコミュニティの構成メンバーだと考えられていたことです。私たちは今でも、例えば家族のような親しい人が亡くなったりするとやっぱり仏壇が欲しくなります。あるいは写真や位牌に時々お線香を上げたり、お花を生けるような場所をつくります。さらには、朝起きるとお茶を上げたり、あるいはしばらく家を空けるときのなどに、ちょっと一声掛けたりします。こうした気持ちは大抵の人が持っていると思います。

これも非常に不思議ですが、そうしている人に、亡くなくても人間の魂は永遠にあると思うかと聞くと、多分大抵の人は「よく分からない」となります。ひょっとしたらあるかもしれないけれど、ないかもしれないという。つまり、この問題を突き詰めていないのです。これは日本の伝統的な死生観からきているわけですが、亡くなった後も自分たちの世界の仲間ということです。お盆の時には帰ってくるのか、そういう感覚できています。

このように、日本のコミュニティの持っている特徴には、自然と生者と死者のコミュニティという世界観があります。言い換えれば、コミュニティは、横のつながりと縦のつながりを両方持っているのです。横のつながりというのは、現状での自然との関係だったり、人間同士の関係です。縦のつながりになってくると、遠い昔から今までと言ってもいいし、逆に今度は逆に遠い未来までと言ってもいい。だからこの縦と横のつながりの中で、われわれは生きている。そういう中に自分たちの生きる永遠の世界があるという感覚でかつて人々は生きていたということです。

コミュニティの多様性

このようにコミュニティは、今よく語られているような、世の中がいろんな問題を起こしている、結

び合ってもうちちょっと上手にやっていきたいと思いますというものではありません。自分たちの生きる世界が、コミュニティそのものなんです。そして何か、みんなで協力し合わないとまずいようなことが起きた場合には、そこでコミュニティが機能し始めるといいますか。だから、実際にはみんなでお祭りやいろんな年中行事をやったりします。その中には、昔から続いてきたこともあるし、新しいものが加わったりします。そんなことをしながら、コミュニティがあるわけです。だから、コミュニティの中にはいろんな人々の経済活動も含まれているし、今日のフォーラムのテーマの一つのような、今日的に言えば非営利のような形で行ういろんな活動も含まれます。それから、自分たちの土着的な信仰のようなものも含まれている。そうしたいろんなものが、混然一体になってコミュニティが存在しています。それが、時には助け合いをするという役割を果たしていきます。

このように共同体の中には、いろんな小さい共同体がたくさんあるのです。上野村というのは集落ごとの共同体があります。また、明治以降全く合併しないできている村なので、上野村としての強い結束力のあるコミュニティがあります。それから、村の中の職業別のコミュニティもあります。神社の氏子のコミュニティもあれば、お寺の檀家さんのコミュニティもあります。最近では子育て世代が一つのコミュニティをつくったりしています。だから、上野村も一つの単体のコミュニティだけがまとまっているわけではありません。その中には小さいコミュニティ、小さい共同体が多様な形であると見てもらえればと思います。また1人の人間は一つコミュニティに属しているわけではなくて、三つ四つに属しているということになります。

私は村の中では一番属していないほうですが、実はこれがあるために何か課題が発生したときに応援しやすいんですね。例えば、仮に私が上野村で大けがをして、退院はしたけど、しばらくは療養状態になったとします。そうすると、隣近所の人が多分ご飯を持ってきてくれたりして、何とか支えてくれるということになるでしょう。ただ、その場合でも大変になってくるのは、お風呂が五右衛門風呂なので、もし腰を悪くしていると、あの風呂は入りにくい。一つの考えとしては、急ぎょそれを直して今様の風呂をもう一つ新設するという手もありますが、そうしなければ、近所の人が入浴介助をするというのは大変です。そうすると多分、役場が手配してくれてデイサービスセンターに迎えに来てもらいます。向こうのほうには車いすでも入れる風呂があります。ただ、その後も僕の回復が長引いて何ヶ月にも及ぶとなると、さすがに隣近所の人たちもくたびれてきます。そのときには多分、私が付き合っている村内のグループの人たちが適当に対応してくれます。

さらに、食事を毎回作るのも大変になってくると、今度は村のお弁当サービスを利用します。でも集落の人たちが、そっちのほうで3食全部と言わなくても、毎日1食は自分たちが持っていくからとか、その辺りをあうんの呼吸でやってくれるかと思います。

役割分担を何となくその状況に応じて適当に変更させながら全体の機能として支えていく。もちろんそこで役場側がやれること、必要なことが出てくれば役場がやるというように、全機能を使って支援をしていく形になります。だから長期的な支援ができる。やはり1グループだけに全てを任すというのは、しばらくならいいですけども、何ヶ月にも及ぶのは難しい。こうした支援ができていくのも、小さいコミュニティが内部にたくさんあって、そこで支え合うことができるから、全体としても機能するということです。

100年後も同じ行事を続けているような変動しないコミュニティがあり、一方で場合によったら消えていくものもあれば、新しくできていくものもある。また、消えないんだけど中身は変わっていくというものもあるでしょう。それから、集落の中のいろんな課題を解決するための共同体でいうと、何をやると決まっているわけではなくて、テーマ性で言うとはぼんやりしたものになります。ただ、何かあったときには動き出すという、そういう感じのものになってきます。こうした多様性を持っていてこそ、全体としてはコミュニティ型社会ができると考えています。

コミュニティを生み出した共有された価値

機能だけでまとまっているものは、最終的にはちゃんとしたコミュニティにならずに壊れてしまう可能性が強いといえます。最初の共同体は何かというと、家族です。仮に2人だったとしても、やっぱりそれが一番この社会が持っている小さい共同体と言ってもいいと思います。そうすると、家族は何によってつながっているかということ、別に課題でつながっているわけではありません。もちろんお子さんが小さければ、お子さんの面倒をちゃんと見るなどの課題が親のほうにはあります。だけど、子どもさんが大きくなってくれば、あんまり課題もなくなってくる。だけど、結び合っただけで家族という世界をつくられている。これはある程度心地が良い世界です。問題をかかえていることもあるかもしれませんが、機能で家族はつくられていないということです。

家族が比較的良い家族というか安定した家族であるということになってくると、そこには絶えずお互いに健康を気にし合っているといえますか、元気でありますよというように、むしろ祈りに近いものがあります。それは、もしご両親が年を取って亡くなるようなとき、残っていく子どもたちとか、その頃にはお孫

さんもいるかもしれませんが、そういう人たちに、ぜひこれからも幸せでねっていうような祈りの気持ちがあります。それから、残されていく人から見れば、お父さん、お母さん、亡くなった後も成仏してねみたいな、これもまた祈りのような気持ちがあります。だから、絶えずそういうもので結んでいるのが家族です。

ローカル信仰の共有

祈りの部分でいいますと、戦前の日本は、国家神道を軸にして精神世界をつくろうとしました。国家神道というのは神様信仰であるとともに皇室信仰です。それがとんでもないことをやりまくったといえます。戦後になると、政教分離という形で宗教と政治をはっきり分けましようとなりました。ただ、戦前も実は宗教と政治との一体はなかったんですね。日本は一面では近代国家ですから、公式には国家神道は宗教ではありませんという立場だったわけです。では何ですかというと、国家神道は日本人の心ですとか、よく分からないこと言っていました。だからあれは宗教じゃないから政治に関わってきてもいいんだという、実際にはごまかしにすぎませんが、そういう立場を取っていました。

だけど戦後になりますと、それも含めて駄目よとなりました。それ自体は当たり前で、そんな宗教団体が政治を動かすなんていうのはとんでもない話です。ただ、そのときにもう一つ問わなくてはいけないことがあります。それは、明治以前に日本の社会でいろんな地域にあった信仰というものが、宗教信仰だったのかということです。

それは、自分たちの生きる世界の祈りに近いものでした。上野村にいと山の神を大事にしなきゃねみたいな感じがあります。水の神も大事にしようねみたいな、そういう世界があるわけです。だけど、山の神教という教団はないし、水の神教という教団もありません。ただ自分たちの生きる世界の中に、森を守ってくれている神様がいます。水を守ってくれている神様がいます。そういう神様に感謝しながら生きているという、ただそれだけなわけです。だから、そういう土着的な信仰といえば信仰ですけど、それが地域社会の中で果たしていた役割がありました。それを切ってしまったために、田舎に行くと地域社会が逆に壊れてしまうという問題があります。

上野村における結び付きというのは、山の神の大祭というのがあります。山の神の大祭は神主もなんにも来なくて、山の神を大事にしている人たちが山の神を祭っている所に行って、山の神が好きな魚とお酒を供えて、あとは自分たちが飲んでいるという、ただそれだけの話なんです。でもやっぱり何となくそれもしておかないといけないような気がするといいますか。何

がいけないのか分かんないんですけども、大事にしようねというそういう感じですか。そういう生き方の中に地域社会があって、共同体がある。だからそれを、これは宗教だからとか言って外すと、結局地域社会が空洞化していくという、そういうことが起きてしまいます。

コミュニティは「機能」か、生きる世界か

このように共同体というの、どこかで祈りに似たような気持ちというものがみんなを結んでいます。この地域にこういう課題があって、それを解決するためにどうしてもこういうグループをつくって、共同して助け合っとうということになるのですが、それだけで動いているかというところでもありません。その奥にはみんながうまく生きていってほしい、できたら幸せに生きていってほしいという祈りのような気持ちを持っています。だから今この課題だけは解決しようというかたちで動くものだと思ってもいいという気がします。

機能だけで動く役所の下請けみたいになってしまいうわけです。役所は祈りがない世界といいますか、本当に機能だけで動きます。ですので、結局私たちの生きる世界をちゃんとつくろうとすると、それは行政にはできないことを意味しています。行政は確かに制度をつくることもできる。時には補助金をつくることもできる。そのことによって有効性があることも確かなので、それはきちっとやってくれなきゃ困る。だけど、私たちの生きる世界は、それを使ってわれわれがつくるしかありません。

例えば村のお神楽で能面を新調せざるを得ないとき、そのお金を行政が出そうと言うことはできます。だけど村の祭りを維持する力は行政にはないわけです。だから行政からそのお金はもらうけれど、結局自分たちの共同体の祭りを維持する力は共同体のほうにあると言わなければいけません。行政的なものは重要なんだけど、限界があります。私たちが本当につくらなければいけないものは、自分たちの生きる世界です。それは多様であって、小さなコミュニティが集積しながら全体として機能する。そういう形に持っていくためには、あらゆる小さな活動団体が重要になると考えています。

都市部のほうでも、はじめはある目的で場がつけられてくるのですが、やっていくとそこにいろんな要素が入ってきています。また、はじめに企画した人がいますが、だんだん運営過程でだれが主導権を持つかわからなくなります。これは古い共同体のかたちとすぐ内容が似ています。気がつくとも単体の目的ではなく、いろんな要素が入り込みます。そうしたことが都市部でもできつつあるのではないかと思います。

(うちやまたかし)